

平成25年10月7日

学位（博士・言語教育学）申請論文 審査報告書

〈学位申請者〉 氏名 吉川 幸修 平成24年度 満期退学

〈論文題目〉 『醒睡笑』における漢語の歴史的変遷の考察
—読み方の変化を考える—

審査委員

主査 外国語学部教授

阿久津 智 

副査 外国語学部教授

木村 政康 

副査 立教大学文学部教授

沖森 卓 

I. 論文の主旨

本論文は、江戸時代初頭に成立した笑話集である『醒睡笑』を主な資料として、室町時代から現代に至るまでの、日本語における漢語の読み方の変遷について論じたものである。

現代日本語における漢語の読み方は複雑な様相を呈しており、その背景には、漢語の読み方が時代とともに変わってきたことがあると考えられるが、その実態については不明な部分が多いと言われる。そこで、本論文では、日本語の漢語の読み方の変遷（主に室町時代以降）について、読み方の変化のパターンを明らかにする（グループ化する）ことを目指し、調査・分析・考察を行った。

本論文では、まず『醒睡笑』の資料的価値について論じた。初めに『醒睡笑』の諸本の系統の整理を行い、本研究にとって最もふさわしい伝本を選定するとともに、これまでに『醒睡笑』を資料として行われた先行研究の整理を行った。

次に、『醒睡笑』を主な資料として、漢語の読み方について論じた。まず『醒睡笑』に現れた現代と異なる読みの漢語として、「行灯（あんとう）、有徳（うとく）、高声（こうしやう／こうせい）、境界（きやうかい）、群集（くんしゆ）、軍兵（くんひやう）、越年（をつねん）、飲酒（おん-）」（（）内の読みは寛永版本『醒睡笑』のもの。濁点は無表示）の8語を本研究の対象と定めた。

これらの8語のうち、5語については、諸資料により、字音の交替によって読み方が変化したものであることが認められた（「有徳（うとく→ゆうとく）、高声（こうしやう→こうせい）、群集（くんしゆ→ぐんしゅう）、越年（をつねん→えつねん）、飲酒（おんじゆ→いんしゆ）」）。字音交替は、呉音から漢音への交替が多いとされるが、本調査でも同様の傾向が見られた。

「群集」には、漢語の読み方の変化に関して、上とは別の要因も関係すると考えた。「くんしゆ→ぐんしゅう」という読み方の変化は、同音異義語を区別するためのもの（「君主」との同音衝突を回避したもの）であり、また、「集」における「しゆ・じゆ」の読み方（本来の字音は「じふ・しふ」）は、ほかの字との混同によるもの（「聚」の読みを当てたもの）ではないかという説を立て、その検証を行った。

また、撥音の後のハ行子音の読み方が濁音 [b] から半濁音 [p] に変化している現象について、「軍兵（ぐんびやう→ぐんぴょう）」を中心に、調査・考察を行った。先行研究の諸説について再検討し、歴史的に、撥音の後で連濁していたものが連濁しなくなる（清音化する）という現象（ここでは「脱連濁化」と呼ぶ）がかかわっていると結論づけた（[b] から [p] への変化は、ハ行以外の行における「清音化」と並行する現象と見ることができる）。

結論として、本研究では、漢語の読み方の変化のパターンとして、「字音の交替」によるもの、「同音の回避」によるもの、「字音の混同」によるもの、「半濁音化（脱連濁化）」によるものがあることを示した。

II. 論文の構成

本論文の構成は、次のとおりである。

目次
凡例

1. はじめに
2. 研究資料としての『醒睡笑』①
 - 2.1. はじめに
 - 2.2. 『醒睡笑』の紹介
 - 2.2.1. 成立時期
 - 2.2.2. 成立事情
 - 2.3 諸本
 - 2.3.1. 諸本の系統
 - 2.3.2. 諸本の分類
 - 2.3.3. 伝本の確認・分類に関する先行研究
 - 2.3.4. 系統図
 - 2.4 まとめ
3. 研究資料としての『醒睡笑』
 - 3.1. はじめに
 - 3.2. 『醒睡笑』に見られる言語に関する事柄
 - 3.2.1. 『醒睡笑』に見られる安楽庵策伝の言葉に関する考え方
 - 3.2.2. 『醒睡笑』に見られる韻書や字音についての記事
 - 3.3. 研究資料としての価値
 - 3.3.1. 口語資料としての価値
 - 3.3.2 伝本の中でどれが善本か
 - 3.4. 『醒睡笑』を資料として使った先行研究
 - 3.4.1. 四つ仮名（ジ・ヂ・ズ・ヅ）の混乱の研究
 - 3.4.2. オ段長音における開合（開音 [o:] と合音 [o:]）の混乱の研究
 - 3.4.3. 形容詞・動詞の音便化
 - 3.4.4. 呉音と漢音の交替
 - 3.4.5. 女房詞
 - 3.4.6. 漢語・和語
 - 3.4.7. 敬語
 - 3.4.8. 動詞・形容詞の連体形終止法
 - 3.5. まとめ
4. 『醒睡笑』における現代とは異なる漢語の読み方①（字音の交替）
 - 4.1. はじめに
 - 4.2. 調査方法と使用資料
 - 4.3. 調査結果
 - 4.3.1. 佐藤亨（1988）の挙げる14語の調査結果
 - 4.3.2. 室町時代から現代の辞書における調査結果
 - 4.4. 調査結果の考察
 - 4.4.1. 字音交替の有無と字音交替が起こった時期
 - 4.4.2. 字音交替の様相
 - 4.5. まとめ
5. 『醒睡笑』における現代とは異なる漢語の読み方②（同音の回避）
 - 5.1. はじめに

- 5.2. 先行研究
- 5.3. 「群集」における同音回避
 - 5.3.1. 「群集」の読み方の確認
 - 5.3.2. 「群集」と「君主」
- 5.4. 同音異義語の変化に関する調査
- 5.5. 調査方法と調査手順
- 5.6. 調査結果
 - 5.6.1. 室町時代に同音異義語を持っていたものの調査結果
 - 5.6.2. 室町時代に同音異義語を持っていなかったものの調査結果
- 5.7. 調査結果の分析
- 5.8. まとめ
- 6. 『醒睡笑』における現代とは異なる漢語の読み方③（字音の混同）
 - 6.1. はじめに
 - 6.2. 「集」の読み方
 - 6.2.1. 「集」の字音
 - 6.2.2. 「集」を「しゅ・じゅ」と読む例
 - 6.3. 先行研究
 - 6.4. 仮説・検証
 - 6.4.1. 仮説
 - 6.4.2. 仮説の検証
 - 6.4.2.1. 「聚」の読み方
 - 6.4.2.2. 「聚」の意味
 - 6.4.2.3. 「聚」の熟語
 - 6.5. 考察
 - 6.6. 「聚」の読み方
 - 6.6.1. 「聚」の字音
 - 6.6.2. 「聚」を「しゅう・じゅう」と読む例
 - 6.7. 仮説・検証
 - 6.7.1. 仮説
 - 6.7.2. 仮説の検証方法
 - 6.7.2.1. 6字の読み方
 - 6.7.2.2. 6字の意味
 - 6.7.2.3. 6字の熟語
 - 6.8. 考察
 - 6.9. まとめ
- 7. 『醒睡笑』における現代とは異なる漢語の読み方④（半濁音化①）
 - 7.1. はじめに
 - 7.2. 先行研究
 - 7.3. 仮説
 - 7.4. 調査方法を検証方法
 - 7.5. 調査結果
 - 7.5.1. 「常用漢字表」の調査

- 7.5.2. 『新選国語辞典』調査の結果
 - 7.5.3. 『日葡辞書索引』調査の結果
 - 7.6 調査結果の分析
 - 7.7. まとめ
 - 8. 『醒睡笑』における現代とは異なる漢語の読み方④（半濁音化②）
 - 8.1. はじめに
 - 8.2. 撥音の後のハ行音
 - 8.3. パ行音の増加の要因①（新清の機能）
 - 8.4. パ行音の増加の要因②（脱連濁化）
 - 8.5. まとめ
 - 9. おわりに
- 引用文献
参考文献
付表

III. 論文の概要

〔第1章 はじめに〕

第1章では、本研究の目的、本論文の構成について、述べている。

本研究の目的については、「日本語の漢語の読み方の変遷を見ていき、漢語の読み方が時代とともに変わっているのか、変わってきているとしたら、その変化はどのようなものか」を明らかにし、その上で、「読み方の変化のパターンを明らかにし、同じような現象が見られるもののグループ化を行いたい」とし、これにより、「規範的でない漢語の読み方を体系的に説明できるようになると思われる」としている。

漢語の読みの変遷を見るに当たっては、調査対象を近世初期とし、同時期に成立した『醒睡笑』を主な資料とするとしている。

〔第2章 研究資料としての『醒睡笑』①〕

第2章では、『醒睡笑』の資料的価値を確認するため、『醒睡笑』の諸本に関する先行研究を整理し、諸本の系統図を作成して、『醒睡笑』に関する書誌学的事実をまとめている。

その主な内容は、『醒睡笑』は、元和年間（1615年から1623年の間）に、安楽庵策伝が板倉重宗の依頼によってまとめたもので、原本は存在せず、広本系と略本系の2系統の伝本が今日に伝わっている、などである。

〔第3章 研究資料としての『醒睡笑』②〕

第3章では、『醒睡笑』の資料的価値を確認するため、まず『醒睡笑』にある言葉に関する記事について触れ、続いて『醒睡笑』を資料として用いた先行研究について概観している。

まず、『醒睡笑』にある言葉に関する笑話を紹介し、ここから作者（安楽庵策伝）の言葉についての考えや、当時の人々の漢字音に関する意識がうかがわれるとしている。当時は、和語を漢語化する（漢字表記し、音読みする）ことが

はやっていたが、作者はそれに対して、批判的であったこと、また、唐音（ふうの発音）がもてはやされていたことなどについて述べている。

続いて、『醒睡笑』は、室町後期から江戸初期の話し言葉を知るのに価値ある資料として、これを資料とする多くの研究があることを紹介している。特に広範囲な研究として、佐藤亨『喃本よりみたる近世初期言語の研究』（1988）について、やや詳しく触れている。

また、本研究にとって最もふさわしい伝本として、振り仮名が多く、刊行年が明らかなことから、寛永版本『醒睡笑』（以下、寛永版本）を選定している。

〔第4章 『醒睡笑』における現代とは異なる漢語の読み方①（字音の交替）〕

第4章では、佐藤（1988）における『醒睡笑』の漢語に関する調査を紹介し、同書に挙げられている「現代と読み方を異にする」14語について、寛永版本およびその他の資料で確認を行っている。

まず、佐藤（1988）の挙げた14語について、寛永版本（および他の『醒睡笑』諸本）で確認し、「行灯（あんとう）、有徳（うとく）、高声（こうしやう・こうせい）、境界（きやうかい）、群集（くんしゆ）、軍兵（くんひやう）、越年（をつねん）、飲酒（おんじゆ）」（（）内の読みは寛永版本のもの。濁点は無表記）の8語について、寛永版本で確認できたとし、この8語を研究の対象と定めている。

続いて、この8語の読み方について、室町時代から現代までの辞書によって、その変遷たどり、このうちの5語に読み方の変化（字音の交替）を確認している。その5語は、「有徳（うとく→ゆうとく）、高声（こうしやう→こうせい）、群集（くんしゆ→ぐんしゅう）、越年（をつねん→えつねん）、飲酒（おんじゆ→いんしゆ）」である（「行灯」と「境界」については、室町時代にも現代語と同じ「あんどん」と「きやうかい」の読み方があり、「軍兵」については、室町時代には「ぐんびやう」であり、現代語にも「ぐんびよう」の読み方が認められるとしている）。

さらに、この5語の字音交替について、漢和辞典（韻書・韻図を含む）および訓点語資料等に当たり、「群集」のみが「漢音から呉音への交替」であり、残りの4語は「呉音から漢音への交替」であることを確認している。呉音から漢音への交替が多いことについては、先行研究の結果と一致するものだとしている。

〔第5章 『醒睡笑』における現代とは異なる漢語の読み方②（同音の回避）〕

第5章では、「群集（くんしゆ→ぐんしゅう）」を取り上げ、その変化の要因について論じている。

ここでは、「君主」との同音衝突を避けるために読み方を変えたのではないか（同音の回避）という説を立て、まず、そのような現象（同音異義語の言い換えや読みかえ）の例を挙げている。

続いて、実際に同音異義語の読みが変化しやすいのかどうかを探るために、『日葡辞書』（1603-04年刊。室町時代の言葉を反映するとされる）の索引と『新選国語辞典』を用いて、サンプル調査を行っている。その結果、「同音異義語を持つ語は、同音異義語を持たない語に比べ変化しやすいようである」としてい

る。これらを傍証として、「群集」が「君主」との「同音の回避」のために読み方を変えたのではないかという「可能性」を示している。

〔第6章 『醒睡笑』における現代とは異なる漢語の読み方③（字音の混同）〕

第6章では、「群集」の「集」における「しゅ・じゅ」という読みが本来の字音ではないことを取り上げ、その読み方の発生について論じている。

ここでは、「集」における「しゅ・じゅ」について、ほかの字と混同されたことによって起こった読みではないかという説を立て、まず、そのような現象の例を挙げている。

続いて、『集』における『しゅ・じゅ』の読みは、『聚』との混同によって起こった」という仮説を立て、これについて、「聚」が、(1) もともと「しゅ・じゅ」という読み方を持つか、(2) 「集」と類似の意味を持つか、(3) 「集」と入れ換えられる熟語を持つか、という3つの観点から、検証している。その結果、「仮説が真である可能性は高い」としている。

さらに、「聚」を含む熟語における「聚」の読み方に「しゅう・じゅう」が多いことについても、仮説検証を行い、結論として、「集」の字音が当てられたためではないかとしている。

〔第7章 『醒睡笑』における現代とは異なる漢語の読み方④（半濁音化①）〕

第7章では、「軍兵」の読み方が「ぐんびやう→ぐんびよう」と変化したことを取り上げ、二字漢語における撥音の後のハ行子音の濁音化（[b]化）・半濁音化（[p]化）について論じている。

ここでは、先行研究を基に、(1) 現代語においては、撥音の後のハ行子音は[p]形をとる、(2) 現代において、撥音の後のハ行子音が濁音化している語は、昔からあったものである、(3) 撥音の後のハ行子音は、室町時代においては[ɸ]と[b]の交替が比較的多く、現代においては[h]と[p]の交替が比較的多い、という3つの仮説を立て、『日葡辞書索引』、「常用漢字表」、『新選国語辞典』を用いて、それぞれについて検証している（統計学的手法を用いている）。その結果、いずれも認められ、これらから、「『びよう』から『ぴよう』への変化も説明可能である」としている。

〔第8章 『醒睡笑』における現代とは異なる漢語の読み方④（半濁音化②）〕

第8章では、前章に続き、ハ行子音の濁音化・半濁音化を取り上げ、現代語に半濁音化が多いのはなぜなのかについて、先行研究を踏まえて、論じている。

ここでは、撥音の後のハ行子音に起こる現象を、(1) 音声変化を起こすかどうか、(2) 清音になるか濁音になるか、の2つの観点から、「本清」（変化なし）、「本濁」[b]（変化なし）、「新清」[p]（半濁音化）、「新濁」[b]（濁音化）の4つに整理して（「本清」と「新清」は造語）、検討を行っている。その結果、「語中で使われていることを示す」という点と、「清音であったことを示す」という点で、機能的に「新清」（半濁音化）が優れており、これが半濁音化の増加に結びついているとしている。

また、室町時代から現代にかけて、撥音の後に濁音化（連濁）していたもの

が連濁しなくなるという、「脱連濁化」(造語)というべき現象が広く起こっているが、ハ行に関しても、他の行の「清音回帰」と並行する現象として半濁音化が起こったのであろうとしている。

[第9章 おわりに]

第9章では、本論を要約している。

IV. 論文の総合評価

[論文提出までの経緯]

筆者は、平成21年4月に本学言語教育研究科博士後期課程言語教育学専攻に入学し、修了単位10単位を取得、外国語(英語)検定試験にも合格し、平成25年3月に博士論文を提出の上、同課程を満期退学している。

本論文の申請は、言語教育研究科博士論文申請規程B日程により進められている。平成22年6月7日に学位論文提出許可願いが出され、平成22年6月25日、言語教育研究委員会で承認されている。論文提出時の業績は、博士論文中間発表会(平成23年12月7日)、『拓殖大学言語教育研究』、及び学外の研究会誌における発表を含め、計7本となる。完成論文発表会は、平成25年1月12日に実施され、平成25年1月26日の言語教育研究委員会で論文の受理が承認されている。論文は平成25年3月29日に提出、受理されている。

[論文の審査結果]

審査委員による論文審査を平成25年9月27日に行い、審査の結果、全員一致で「合格」とし、続いて、最終試験(口述試験)を平成25年10月7日に実施し、審議の結果、全員一致で「合格」と判定した。

V. 審査所見

本論文は、江戸時代初頭に成立した笑話集である『醒睡笑』を主な資料として、室町時代から現代に至るまでの、日本語における漢語の読みの変遷(実相と変化の要因)について論じたものである。

日本漢字音に関する研究は、近年大きく進歩し、その知見は非常に精緻になってきている。これは、それまで利用されていなかった多くの資料の分析が進んだことが大きいと思われるが、これらの研究は、どちらかというところ、日本漢字音の体系的構築を目指す静的な研究が主で、その変遷について考察する動的な研究は、これまでそれほど多くはなかった。本研究は、扱った語の数こそ少ないものの、漢語の読みの変遷を正面から取り上げ、先行研究や文献資料を博搜し、個々の語について深く追究するとともに、漢語の読みの変化をいくつかのパターンにまとめることを試みたという点で、日本漢字音に関する動的な研究を進めるものとして、評価できる。

具体的には、次の点に本研究の特徴が見られる。

- (1)『醒睡笑』の諸本の系統関係を整理し、図に示した(系統図を作成した)。
- (2)『醒睡笑』には、作者を含め、当時の人の漢字音に関する知識や意識が現れていることを示した。
- (3)室町時代から現代にかけての漢語の読みの変化に関して、呉音から漢音

への字音交替が（漢音から呉音への交替に比べて）より多く見られることを確認した（先行研究の成果の補強）。

- (4) 室町時代から現代にかけての漢語の読みの変化に関して、その要因として、同音異義語を回避するための読みかえがあることを示した。
- (5) 室町時代から現代にかけての漢語の読みの変化に関して、その要因として、似た意味を持つ他の字との混同（他の字の音を当ててしまうこと）があることを示した。
- (6) 室町時代から現代にかけての漢語の読みの変化に関して、その要因として、撥音の後で連濁していたものが連濁しなくなるという現象がかかわっており、ハ行子音における、[b] → [p] の変化もこの現象として捉えられることを確認した（先行研究の成果の再検討・再整理）。

また、この論文には、方法論的な面でも注目すべき点がある。日本漢字音に関する研究は、かつてのもっぱら中国中古音の体系に基づく演繹的な研究から、近年の古訓点資料等に基づく帰納的な研究へと軸を変えてきている。本論文では、この両者の研究方法を用いている（第4章）ほか、統計学的手法（第7章など）や、音声学・音韻論的な方法に基づく分析（第8章）なども試みている。これは、個々の語に見られる個別の現象（読みの変化）を一般的な理論によって広く論じようとする野心的な試みでもあると思う。審査員は、このような試みは、ユニークなばかりでなく、日本漢字音の変遷の要因の探究に関して、実際に、いくつかの仮説（上の(4)～(6)に関するものなど）の蓋然性を示しうるという点において、高く評価できると考える。

以上に示されるように、本研究は、研究テーマ、先行研究・文献資料・調査などの情報収集、研究方法のいずれにおいても、適切・妥当なものであり、論旨も妥当なものである。特に研究の細心さに関して、『醒睡笑』を主たる資料とするに当たって、その諸本を確認し、その関係を整理して、系統図を作ることから始めていることなどは特筆される。

論文の構成、言語表現、体裁などについても、問題はない。

論文の内容について、独創性を有すること、当該学問分野の研究に幾ばくかの貢献をなすものであることは、上に述べたとおりである。また、本論文の執筆者には、将来高等教育機関で自立した教育者・研究者として当該分野の中で活躍していく能力および学識が備わっていることも認められる。

VI. 審査委員会結論

以上により、本審査委員会は、慎重・厳重な審査の結果、総合的に判断し、三委員全員が一致して、学位申請者に対し、学位「博士（言語教育学）」を授与することに同意するものである。